

水窪

語法にみる遠州山地方言のサンプル

山口幸洋

静岡県が、長野、愛知の両県と接しているところに、磐田郡水窪町がある。

私の水窪方言の観察は、一九五六年八月より、五八年七月のあいだにさいさいおとずれての、主として、西浦、遠木沢、大野、水窪本町、という地点におけるものによる。水窪には、このような村落がきわめて多くあるが、それぞれあいが(注)、ほぼ一様に共通するものであるので、これを水窪方言とよび、便宜上、右の地をえらんで、精査を心掛けたのである。

水窪での遠州北部方言が、水窪方言である。この意味で、水窪方言の記述は、遠州北部方言のサンプルをなす、といううる。独自の一面もみられようし、信州下伊那地方にかたむいた一面もあるが、その本領は、北遠方言のすがたをみせるところにある。

この小稿は、文法面からみた方言の、観察と把握をこころざすものである。方言文法の研究について思うことは多く、私なりの方言観、方言文法観が、うちだされはするが、その方の意見を書くらしくするよりは、まず、いまだにまとまった資料のない遠州方

言(語法)のために、精密な実状をつたえることにつとめる。

△ √内の方言形には、とくに語法上の意義のある場合を除いて、アクセントを附さない。なお、△ √内で、点、・ を使い分けたので注意されたい。

(注)部落ごとの方言状態が、そっくり共通してあらわれているといえない事実は、一部の音韻現象、文アクセント、方言語彙の細部、にわたれば、それをいうことができる。また、水窪の町部で、方言丸出しというしゃべり方が失なわれてきている問題、次に、きつすいの土地者同志でありながら、方言形の認知の上で食いちがうことがあるという個人差の問題などで気づくところがある。

(一) 体言的語部における助詞

○格助詞

△ ソコイ 置ク√のように入ることのある「へ」。中年以上の人が、△ ソコウエ 置ク√と、はっきり「え」という点に注意さ

れる。

△ハナナ摘ム(花を)、カキョー食ウ(柿を)、サロー見タ(猿を)
アミョー買ウ(鮎を)、カゴモツ(籠を)√のようにあらわれる

「を」。△カキウ、オ√のように、「two」ということもふつう。

△雨ン降ル√ということのある「が」。

△アツチツカラ 来タ√のようにいうことのある「から」。

△ヤレツテ 頼マレタ。大キイツテ 話ダ√の「って」(注)。

△アソコデ ヤル√の「で」。

△猫ト遊ブ。雨ダト思ウ√の「と」。

△ココニアル。盆ニ来ル。ヒヨリンナル(日和になる)√の「に」

△オレノ手。机ン中√の「の」。

△ソレヨカ 大キイ・ソレヨリヤ。・ソレヨリモ ・ソレヨ

リカ ・ソレヨリカワ √とあらわれる「より」。

(注)その働きには二種あり、一は連用形(「といて」にいい
かえられる)で、一は連体形(「といて」にいいかえられる)

である。方言では△ヤレツツツテ 頼マレタ。大キイツツ

ー 話ダ・大キイツツ 話ダ√の形であらわされる。

このような「ツツ」のいいかたは△ヤルツツター(ヤ
るっていうのだ)。ヤツタツツツツ(やったって言った)√

のような表現法にも頻繁に行われるものであって、方言の
文の上では重要な要素となっている。

○並列助詞「か。し。だの。と。とか。に。の。や。やら」は、
おおむね共通語に準ずるものなので省略。

○係助詞。副助詞

△ソツチコソ エライ√の「こそ」。

△コレサイ アリヤ。√の「さえ」。

△誰ダツテ イヤダ√の「だって」。

△スモモデモ 食ベルカ√の「でも」。

△子供ツツ ヨイモンダ√の「って」(「っていいのは」でいい
かえられる)。

△ヤマー恐イ(山は)、ムシャ。オラン(虫は)、イナ。嫌イダ

(犬は)、サキ。ヤール(酒は)、コターデカイ(事は)√のように

いうことの多い「は」。

△俺モ ヤメタ√の「も」。

△イツダカ ワカラン・イツダ ワカラン・そのほか√とあら

わされる「か」(注)。

△ヒトツツキシ・ヒトツツキリ√というときの「ぎり」。

△箱サラ モツテキタ・箱サーラ モツテキタ(箱ごと)√と

いうときの「ごと」。

△フタツンズツ 取ル・フタツズツツ ・フタツツツ ・フタ

ツズツ √とあらわれる「ずつ」。

△タレルダキ 貰ウ√の「だけ」。

△オレヤナンカ ダメダ√のようにいうことのある「なんか」。

△ヒトツナンジャ ナカッタ√とあらわされる「しか」。

△ウソバツカレ 言ウ・ウソバツカリ ・ウソバツカシ ・ウ

ソバツカ ・ウソバーカ √とあらわれる「ばかり」。

△泣ケルケニ 辛イカ(泣けるほど)√とあらわされることの

ある「ほど」。

△浜松マデ√の「まで」。

△今年ヤツ 嫁ニヤルカ、アシタヤツ 来ルゾ√と、時間的な見当をつけるときのいいかた「あたり」。

(注)「何を買うか忘れた」にあたる方言形は△ナニヨカウカ

カ 忘レタ・ナニヨカウダ 忘レタ・ナニヨカウ 忘

レタ・そのほか√であるのを代表例として、副助詞「か」についての方言と共通語の対応関係は複雑で、これのためには非常な紙数を要する。この問題は広く各地の方言に考えられる事実であるから、本稿ではあえて、以上にとどめたい。

(二) 用言的話部の基本形

一、動詞

「買う、笑う、唄う、誘う」など一連の四段動詞が、仮定形において(Kawita) (買)、命令形に(Kawe)、可能動詞として(Kaweru)のごとき音声であらわれることに、注意を要するほか、文法上、いうことはない。

○可能動詞。△ヤレル、歩ケル、見レル、食ベレル、キレル(来)√のような、いわゆる可能動詞は、可能の「資格」をいう場合と、「能力」をいう場合の、二種の用法を備えているが、とくに「能力」をいうだけのいいかたとして、△ヤリエル、歩キエル、ミール(見)、食ベエル、キール(来)、シーエル(為)√がある。

○使役動詞。△ヤラセル、歩カセル、見サセル、食ベサセル、キサセル(来)√のほか、△ヤラカス、歩カカス、見ラカス、食ベラ

カス√のいいかたが行なわれる。

○受身動詞。共通語と同じ。

○そのほか。△ヤツテル、ミテル√より、△ヤツトル、ミトル√の方が有力。この種の、助詞「て」をうけるいいかたには、とくに問題がないので省略。

○敬語動詞。なし。三河及び信州風の、△オイデル、オヤリル、オ起キル√式のいいかたを、よそゆきことばとして使用することがあるていどとどまる。

○罵倒形。コク(言)、シログ(する)、などの語彙のほか、△ヤリヤル、起キリヤル√のヤガルのいいかたがある。

二、形容詞

あらゆる三音節形容詞は△タツカイ(高)、イツタイ(痛)、ハンヤイ(白)、ヒンロイ(広)√のようにいいうる。やや強調の気持がこもる形である。

△ヨイ(良)、高い、広い、面白い√及び、動詞からの派生形△ヤリタイ、見タイ、……√が、△ヨカンナ、高カンナ、広カンナ、面白カンナ、ヤリタカンナ、ミタカンナ√のように、いわれることがある。感動の意味が加わっているとみられるが、形容詞の終止法としては特異な方言形であるといえよう。

○オー イタカンナ

おゝ痛い

○マズ ヒドカンナエ

(むかでにさされたら) ひどいですよ!

爺

中年男↓私

三、形容動詞

いわゆる形容動詞ハラクダ(楽)、イヤダ、ジョーブダ√は、ハラクナ、イヤナ、ジョーブナ√(大人)といいかえられることがある。その過去形もハラクナツツ、イヤナツツ、ジョーブナツツ√のような形式をとる。

いわゆる「比況・様態」をいう「ミタイダ」(注)、(「ヨードダ」、(「フーダ」、及び、用言連用形につづく、「ソーダ」も、この、ナ語尾であられること、もちろんである。

○ウレシソーナナー アノカオ
うれしそうだな、あの顔! 婆

○マメナゾエ
あの人は健康ですよ 50女↓30女

○ダメナツツゾー
だめだったよ 30男↑同年女

(注)ハウマミタイダ、トシヨリヨミミタイニ√(大人)の
ように、「を」をささむいかたをする。

四、体言の述語形
共通語と同じ。

(三) 用言の話部における叙述

一、用言を体言視して叙述をすすめるいかた
「やるのだ。赤いのだ。好きなのだ。やらんのだ。赤かったのだ」にあたる方言形が、ハヤルダ。赤イダ。好キナダ。ヤランダ。赤カッタダ√である(本稿のためえとして、この現象の文

法的意義については、いわないでおく。

二、否定形

ハヤラン、歩カン、見ン、食ベン。赤カナイ√などのいいかた及び動詞の、いわゆる強消形ハヤリヤン、歩キヤン、見リヤン、食ベリヤン√あるいはハヤリヤン√のよう(にも)のいいかたは、方言として特色あるものとはいえないが、水窪方言では次のような中止法に方言的ながたをいろいろにみせている。

たとえば「行かずに、見ずに」にあたるいいかたとしてハイカツコー、ミツコー・イカツコーニ、ミツコーニ・イカツコ、ミツコ・イカツコニ、ミツコニ・イカツコデ、ミツコデ・イカツコシ、ミツコシ・イカツコシ、ミツコシ・イカツコシ・イカツコシ・イカナシ、ミナシ√などをあげることができるのである。一例を文で示せば、

○ソガイナミチ トーラツコー イケルガ
そんな道通らずに行けるよ 中年女同志
のように観察される。

なお、仮定形ハヤリヤン、歩カニヤン、見ニヤン、食ベニヤン√は特殊の表現法をのばしている。(四)の二をみよ。

三、過去及び完了形
ハヤツツ、買ツツ、嗅イズ、死ンズ、見ツ、食ベツ。良カツツ赤カツツ。好キダツツ、雨ダツツ。ヤランナズ、見ナンズ(否定の過去)√などにおける「ツ(ズ)」のいいかたは、水窪方言をよく特色づけているとともに、国語諸方言との比較上、注目すべ

き方言形である。共通語形の「タ(ダ)」のいいかたの勢力が、はつてきたのはさいきんで、本来は次のような区別として、「タ」と「ツ」が対立している。

△花ガ咲イタ。ホタル 出タ。ヨイヤク キタ√といえ、眼前の「花。螢。人」を指してのことばで、そのことをべつの人に話すときに、今、花が咲いており、螢が出ていても、そのことにかかわりなく、△花ガ咲イツ。ホタル出ツ。ヨイヤク キツ√のいいかたになる(したがって、よく文末助詞を伴う)。この例でみるように、その使いわけは「時」の観念によるものではなく(結果的には「過去」を話す場合など、殆ど「ツ」でいう)、完了の助動詞といわれる古文の「つ」とは、一応別個の意味で働いている。相手の面前で、お互いにわかっていることは、どういう、という気持がこの場合の表現に働くことになる。

次に、「タ」でいえて、「ツ」でいえないのは、「俺は……」(一人称)で話される内容である。△だれたれば、アソコニオツツヨ√あるいは△ワリヤ(お前は)アソコニ オツツナ√とはいいが、(オリヤ)アソコニ オツツヨ√のいいかたはない。(△オリヤ) オツツツツヨ——過去完了態√、△オレガ アソコニ オツツヨ√ということも可能。しかし国語では「俺は……」の場合の方が多いし、そして、実際の文では、「この俺は」という主語は、しばしば省略される(このことは、さきに述べた「花」や「螢」の場合の「タ」と「ツ」の使いわけのことと、どう共通する意味であろうか。私は、「タ」と「ツ」の区分を、どういふ専

門語で規定すべきかを知らないでいる。使いわけの実際に即した説明をはつきりと示したことによって、諸家の御教示をおおぐ次第である。

形容詞(及び、形容動詞や動詞否定形)、体言の述語形の場合には、動詞のような使いわけはありえず、共通語形におされるということもなく、さかんに「ツ」で言っている。それから、△アソコニ オツツワ(おったのは)だれた。花ガ咲イツワ いったつだ√のいいかたはするが、△花ガ咲イツ時√とか、△花ガ咲イツリヤ(仮定形)のような文は、稀である。

ことに、いわゆる動詞の過去完了態(あるいは過去回想態)はこれによって確立されているといってもよいほどで、△ヤツタツツ、買ツタツツ、嗅イダツツ、死ンダツツ、見タツツ、食ベツタツツ√は、△ヤツタツツ、見タツツ√より、有力ないかたとなっている。

なお、否定の過去形には、△ヤラナンケ、見ナンケ√という方言形も認められる。

○イクラモナクテ ツマラナンケイェー

とつまらなかつたね 50女↓50男

べつに、当方言の「聞く、引く、敷く、歩く」の過去(及び中止)形は、△キツタ、ヒツタ、シツタ、アリツタ√(あるいは△キツツ、ヒツツ……√)のような音便をみせるものである。

四、伝聞形

「ゲナ」もいふし、「ソーダ」もいふが、遠州山地の特色の濃いのは、

○ケンゾーワ ドコエ イットルチヨ

健三はどこへ行つとるって？ 婆↓嫁

○キブネカラ キタツチヨウワイエ

貴船から来たそうだよ 30男↓父

の、「チヨ」のいいかたである。△雨ダツテヨ、ヤルツテヨ
や、△雨ダトヨ、ヤルトヨ√のいいかたとちがつて、接続助詞に
つつく働きをもっている。

五、「推量及び意志」

推量のいいかたに、「ズラ」で代表される中部地方の特徴的な
方言形を有する点で、当地も例外ではなく、したがってこのこと
は、すでに著名である。しかし、この著名な方言と共通語との対
応関係が、案外、正しくつかまれているのではないだろうか。

ヤルラ(ヤルの推量)	やるだらう(やる、の推量)
ヤルズラ(ヤルダの、)	やるのだらう(やるのだ、の、)
山ズラ(山ダの、)	山だらう(山だ、の、)

この対応表のうち、誤解を招く原因は、東京語が、「やるだ」と
いわぬのに、「やるだらう」というところにある。

△ヤル√と△ヤルダ√の対立が、△ヤランラ、ヤランズラ、
ヤツツラ、死ンズラ、赤イラ、赤カツツラ、山ダツツラ√と△ヤ
ランズラ、ヤランダズラ、ヤツタズラ、死ンダズラ、赤イズラ
赤カツタズラ、山ダツタズラ√の対立である。

「推量」は接続助詞にかかって話される場合もあるが、話手が相
手にむけての表明として、文末助詞を伴って行うことも多い。そ

の場合は、

○オジーニ ナツツライヨ

おじいさんになつたろうよ 爺↓私

○伊勢カラ アンニーモ キタツツライ

兄貴も来たことだろう 50男↓父

のようにあらわされることがある。

「推量」の分野には、ほかに、「ラシイ」のいいかたがあり、打
消的な「マイ」があるが、特徴的な方言形を示すものとして問題
になるのは、△ヤラズ・ヤラーズ、赤カラズ・赤カラーズ、山ダ
ラズ・山ダラーズ・山デアラズ√にみるような表現法である。し
かし、これが、中央語でいえば「やろう、赤かろう、山であろ
う」にあたる意味あいと用法(そのうちには、「反語」表現も含
まれる)をみせるいいかたであることについては、よく知られて
いると思われるので多くを述べない。

ところで、動詞の場合のこの形が、一人称で話されるときは、
いわゆる「意志」のいいかたである。この「ズ」について実例を
あげてくわしく説明するのには、いま、余裕がないし、いろんな
本によって言われていることだから、ここでは、やはり、その方
言形を知らせるだけでおこう。

なお、△ヤラズト思ウ√の△ヤラズ√のいいかえ形に、△ヤラ
カ・ヤラスカ√があつて、これは、「意志」表現としてだけ行わ
れる。

○チヨツクラ コシヨオロサカ

ちよつと腰をおろそうか 50男

(四) 文末表現

その重要性は、ここでいうまでもないことだが、用言的話部のとくに文末にたつ要素としてとりあげられるのが文末助詞表現法である(そのうちにも種類分けが考えられる)これにくらべると動詞の「勧誘・命令・禁止」法は、文末をなす要素というべきだが、文末部の特性を、文末助詞とおなじように備え、あらわしているという点で、ここに一括するものである。

文末表現は、日常生活の対人態度をうちだすという面での発達がおくれている。たとえば「 \wedge ヤレ \vee 」というとき、これは、男同志のことは使いであり、女同志のことは使いであり、年下が年上という態度でもある。

一、「勧誘」

○ヤイ イカイカ ノソソソソトルジヤナイ

行こう行こう、のそのそしとるな 婆↓孫

広く各地でいう \wedge ヤラマイ・ヤラマイカ、食ベマイ・食ベマイカ \vee とあわせて、 \wedge ヤラ・ヤラー、歩カ・歩カー、ミ・ミー(見)タベ・タベ \vee や、 \wedge ヤラズ、歩カズ、ミズ、タベズ \vee のような形で「勧誘」が行われているのは特徴的である。

二、命令

○トメモ ハイレネ

トメモ入りな 婆↓孫娘

○ズボン ハケーネ

ズボンをおはきなさい 30女↓夫

○トマレーヤ トメヤルニ

泊りなよ 泊めてやるから 50女↓私

○オレニモ ヒトツ クリヨイ

おれにもひとつくれ 30男↓子

四段動詞の \wedge ヤレ、歩ケ \vee に対する一段動詞の場合は \wedge ミ、ヨイ、ミー(見)、起キ、ヨイ・起キ、ニ、ヨイ・ネ(寝)、食ビ、ヨイ・食ベ \vee あるいは \wedge ミヨイ、オキヨイ、ネオイ、タビ、ヨイ \vee のように方言形をみせている。これらは敬卑効果には関わりのない形であり、その気持のやわらげは、文末助詞を添えるいいかたで、あるていどあらわれる(右にあげた \wedge \vee の形が、ひとしく、文末助詞「ヤ、ネ」を伴うものである。四段動詞の場合には \wedge ヤレーヤ、歩ケーヤ \vee のようになることが多い)。

なお、「打消仮定」形で相手をうながす、という表現法がしばしば行われる。

○ハヤク ネニヤ

早く寝なさい! 60男↓若い息子

三、「禁止」

「る」語尾の動詞が、このとき、 \wedge ヤンナ、入ンナ、見ンナ、食ベンナ \vee となる。態度をやわらげる気持は、文末助詞が、 \wedge ヤルナエ・ヤルナヨ、見ンナエ・見ンナヨ \vee 、あるいは \wedge ヤルナイネ、見ンナイネ \vee のようにあらわれるいいかたにみられる。

四、「質問」

\wedge ヤルカ。アカイカ。アメカ(雨) \vee 、あるいは \wedge ヤルカー。アカイカー。アカイカ。アメカー \vee にみるようなイントネーションに遠州山地

の特色がうかがわれる。これに関連しての文アクセントについては、いいたいことがあるけれど本稿では控える。疑問の代名詞を使つての「質問」は「イッ ヤルダ。ドレガ アカイダ。イカナダ(どんなんだ)」、あるいは「イッ ヤルダ。……」という形であらわされるが、このときの「ダ」は、いわゆる助動詞的な要素に、文末助詞の要素が、同居している姿である。

およそ、質問をあらわす様式には、共通語の文法形態の上にもすじみちのたため整まりが指摘しえて問題がある。共通語「やるのか。赤いのか。雨なのか」に対応する方言形が、ハヤルダカ。赤イダカ。雨ダカ√であるが、これもそのことがあつて生じた形態のずれのあらわれといえる。

方言では、ほかに、

○ダガヤ 誰が?

若い衆

○ヨイツウエヤ こいつへか?

若い衆

の、「反問」風にたずねる「ヤ」のいいかたがある。次に、

○アンネー シンデツカラダツツカイヨ

姉さんが死んでからだつたらうかね 30女↓母

この文のように、いぶかる気持をいう文末表現法があるが、語形の安定性がうすく、たとえば「ハヤルダカイヤー・ヤルダカイヤー・ヤルダカイヨ・ヤルダカヤ√」のようなものである。この場合は「ハヤルカイヤー……」√のようにもいうが意味の区別は殆どない。(形容詞、そのほかの場合も以上に準ずる)。

ところで、この「カイヤー……」が

○エライコト ヤッタモンダカイヤー

たいへんなことをやつたもんだ 60男

○マー オカシー子ダカイヤー

まあ、おかし子だわね 若い母

と、形容詞で修飾された体言をあらわすときは、単なる「感嘆」の表現と解釈されるのである。これなど、この方言の理解されにくい一面に属するといえよう。

五、(ツ)

「ハヤルゾ、アカイゾ、アメダゾ√、あるいは「ハヤルゾー、アカイゾー、アメダゾー√」のような調子に特色が認められる。これが訛るときのいいかたとして、「ド」あるいは「ロ」が注意せられる。

六、(チャ)

「ハヤルツチャ・ヤルツチャー・ヤルツチャイ・ヤルツチャイ√」にみられる、文末の強調のしかたは、広く各地に行われて周知のものである。東京の「やるってば」と同じ心持を、この方言の解釈にあてることができぬ。

七、(ヨ)

○スギオ ゴロツボン ウツテヨ ヨキンシタワケヨ

杉を五、六本売ってさ、貯金した訳だ 30男↓同輩

共通語の文末助詞「よ」は

- ①体言に直接つく。
- ②用言終止形式につく。
- ③推量形につく。
- ④質問の助詞に。
- ⑤動詞の「命令、禁止、意志、勧誘」に。

などのいいかたで、それぞれの特徴をみせることばである。それが、当方言における「ヨ」は、ほとんど①に重点のおかれた「ヨ」

であり、共通語法とひどくずれている。だいたい、共通語においても、この①は「まだ、八時だよ。わからないのだよ」の意味を「まだ八時よ。わからないのよ」といういいかたなのだから、ただの文末助詞ではない。

しかし「現代語の助詞助動詞」(注)などには、女性が使った場合の「よ」をあげながら、語法上ほぼ同じでも尻さがりの調子であらわれて、そんないなひびきをもつ男性の「よ」のいいかたは、登録されていない。方言における「ヨ」(男女の別なし)はこの東京語の男性的な「よ」を感じさせるもので、間投助詞としてよく用いられることがある点も、それと共通する。

次に、右のものとは異質の、「ヨ」が観察される。

○オラ ヒダルイヨ

おら、ひもじいなあ

婆↓娘

○コリヤー アメダヨ

こりゃあ(そのうちに)雨だな! 50男↓妻

というときの「ヨ」は、相手にむけて「感動してみせる」いいかたである。

(注)①〜⑥の分類は、本書の分類によったものではない。

八、「ワ・ガ」系

東京の「あんなこと言ったら。ぼく、若の花だ」のいいかたには文末助詞「わ」が認められるものとする。「現代語の助詞助動詞」では、助詞「わ」と称して、女性専用の「わたしも ひっぱるわ。男らしくないわよ。困るわね」の例しか、あげていないが、男性的な「わ」表現法は、国語方言では広く行われているは

ずのものであって(したがって、その意義、意味あいについて、説明じみたことをしなくても、理解されよう)水窪方言でも活発である。

その語形が、まさにさまざまで、不安定にいろいろの変化をみせているのは、当方言の特色といってよいものかもしれない。

○ハナレーナンズワイエ

離れられなかったよ

婆↓息子

○カシヨウ クーワイ

菓子を食うんだ

子供↓父

○カンバザクラガ サクワイネ

山桜が咲きまさあね

爺↓私

○メージヤナイワイナー

姪じやないさ

娘↓母

○ヒサ イツタガイ

ひさは行つたよ

娘↓若い衆

○ダダクサニ モチスギルガーヤ

あんまり持ちすぎらあ

40女↓行商の男

日常、実地の方言生活の上からは「ワ・ガ」は、このほかハヤラー・ヤルワ・ヤルワヤ・ヤルワイヤー・ヤルガ・ヤルガイナー・ヤルガイネ・ヤルガイヤー√などのすがた(体言述語形のこの場合は、ほかにハ雨ダーヤ・雨ダーネ√のような文末形もおこしている)で観察せられるが、これには、意味、位相などによる使いわけの作用は強く感じられない。

九、「エ・エー」(イ・エーとも)

水窪方言では重要な文末助詞である。「ヨ」といい、「ワ・ガ」といい、この「エ」といい、文末助詞表現法にみられる共通語と方言のあいだの相違が、体系的なそれであることに着目したい。まず、△山イ行ツエ、マダ遠イエVの「エ」は、「七」で述べた、「よ」の②に対応するいいかたである。

△ソズラエVの場合は、「よ」の③にあたるいいかたである。△来カイエVのように、「よ」の④。

△オ行キエ。行クナエ。行カズエ(行こうよ)Vのように、「よ」の⑤にあたる用法。

以上の半面として、△高イ山ダエ。ソードツエ。ホシズラカエVの「エ」は、「なあ」(①詠嘆、②軽い主張、③同意を誘う)にあてて考えられる「エ」である。そして、

○ナカナカイエ イケレンモンデイエ

なかなか 行けないのね

50女↓若い衆

間投助詞としても頻繁にあらわれる。

○オヤスミエー

おやすみね

○ハヤーエー

おはよう

○ゴツオサマエ

ごちそうさまね

などの、あいさつにも常にあらわれる。

需要の高い「エ」についてくわしくすることは、文末助詞重視の立場からめざしたいが、ここではその概略にとどめざるをえない。

十、「ナー・ネー・ノー・ヤー」

ひとり言風に「よかったなあ」というのを「よかったねえ」と

いえないところに、文法上、「なあ」と「ねえ」の不一致をいうことができる。「ね」の欠陥を補い、「な」そのままの対応関係にある、女性的ないいかたとして、遠州方言には「ヤー」がある。水窪での「ナー・ネー(ていねい)・ノー(大人の男)・ヤー」は言わないことはないといういでどの勢力にとどまり、本来のものとして、「エ」や「ヨ」があるというわけである。

十一、「ドデー」

○アシガドデー シモヤケンナツテ タマランヨニーニナ
ツトツツガヨ

足が、そりやあ、しもやけになつてたまらなくなつていたけどね 婆↓嫁

この一例にみられる「ドデー」は、つよめの間投助詞である。遠州では各地で聞く。

(五) 用言的話部の接続

接続助詞「ガ(撥音化することあり)。ガツラ・ガツツラ(「ながら」にあたる)。クセニ。ケド。シ。タツテ(ダツテ)。デ(「から」にあたる)。テモ(デモ)。ト・トサイガ・トサイニヤ(「とにあたる)。ナリ。モンデ(「ので」にあたる)」などには、二、三の方言形もみられるが、これらはすでに周知のもので、それぞれの用法も、共通語法と異なるものではない。

注意しておきたいのは「ニ」で、それには、△暗クナルニ^{||}マダ帰ラン、あるいは、暗クナルダニ^{||}マダ帰ランVというときの「に」に「の」にあたる「ニ(ダニ)」の場合と、△オコラレル

ニヤミョー(怒られるからやめよ)。サー ネズカ オソイニ(さあ、寝ようか、遅いから)√というときのように、「から」にあたる「ニ」の場合とがあることである。「モンデ」(「ので」)は、「デ」(「から」)のいい替え形としてあるものだが、「デ」のすべてに対応するわけではなく、ここにいう「ニ」は、「モンデ」が対応しない部分の「デ」の、いいかえ形なのである。

「現代語の助詞助動詞」では、「子が死んでから淋しい。山へ行ってから人が来た。早くから寝た」の「から」は格助詞と扱われている。助詞の扱いの問題はともかくとして、この連用中止形の表現法は、水窪方言では△子が死ンデニ 淋シイ。山エイッテニ 人が来タ。早クニ ETA√あるいは、△子が死ンデカラニ 淋シイ。山エイッテカラニ 人が来タ。早クカラニ ETA√のようにも言っており、これにも「ニ」が注意されることになる。

なお、△寒イトニ 儲ケル(寒いうちに)√のような場合に、「トニ」をみる。

仮定形△ヤリヤ、ヨケリヤ。ヤツタラ、ヨカッタラ。雨ナラ、ヤルナラ√には、方言特色をいうことはできない。

(付記)

文法の分野でみる方言体系について、もろさず、くわしく記述するために、三〇枚の限りをつくしたのですが、代名詞準体助詞(形式体言)、文アクセント、及び文章論から考えられる方言的な特徴などについては削らざるをえませんでした。

文語文法や口語文法が必要とする以上に、方言文法では、

日常の会話の実例を重視したいと考えます。これは、この稿で十分に果せるものではないので、べつに、「筆録集」のよいうなプリントを作りたいと考えています。

椋垣実、藤原与一、都竹通年雄、柴田武の諸先生に、直接間接の御指導をたまわっていますが、あわせて、お世話になった、水窪小学校の鷹野圭二、森口福一両先生をはじめの、現地のみなさまの多勢の方々に感謝いたします。